

## ウェールズ再発見

(その3)

1770年から1824年のウェールズ旅行とロマン派詩人

### Wales Rediscovered

- Part 3 -

Welsh Tourism and Romantic Poets from 1770 to 1824

吉賀 憲夫  
YOSHIGA, Norio

Though he had visited the Wye Valley in South Wales, Thomas Gray never made a tour of North Wales. Influential tourists in North Wales in 1770s were Henry Penruddocke Wyndham, Sir Watkin Williams-Wynn and Thomas Pennant. They all took with them artists who could record the scenery of the land in pictures. Sir Watkin was accompanied by Paul Sandby, Wyndham, by Samuel Hieronymus Grimm, and Pennant, by Moses Griffith. Welsh guidebooks with their splendid illustrations were published and they made it possible for younger generation to travel through Wales on their own.

Poets put final touches to Wales rediscovered by Gray, Gilpin and other artists. Wordsworth and Coleridge made pedestrian tours through North Wales in 1790s. After coming back from Ireland, Shelley roamed Wales from 1812 to 1813. Though the Industrial Revolution drew industrialists and many English and Irish workers to nameless Welsh valleys, Wales as an ancient land of bards was rediscovered mainly by poets and artists in the late eighteenth century.

6

ウェールズが観光の対象として見なされ始めたのは1770年前後のことであった。その点でトマス・グレイやウィリアム・ギルピンが1770年に行なったワイ川を中心とした旅行は象徴的なものであった。グレイが満喫し、ギルピンが「ピクチャレスク」の原点としたワイ川はモンマスシャーを流れている。現在では当然モンマスシャーはウェールズの1つの州であるが、当時のモンマスシャーは少々複雑な位置

にあった。このイングランドに接した豊かな地域はウェールズの国境が最終的に確定された後も、他のウェールズの諸州と制度上必ずしも一本化されていなかった。モンマスシャーは宗教制度上は他のウェールズ諸州と同様、ウェールズ教会の下にあったが、しかし司法上はウェールズ通常裁判所には属さず、イングランドの四季裁判所の管轄下にあった。また国会議員選出にあたってはイングランド諸州と同等の資格が与えられていた。そのような訳で当時は現在のウェールズを指す言葉として「モンマスシャーおよびウェールズ」が一般であった。すな

わち当時のイングランド人にとってはモンマスシャーは必ずしも「ウェールズ」ではなかったのである。地誌学者で後、ウィルトシャー選出国会議員となるヘンリー・ペンラドック・ウィンダム(Henry Penruddocke Wyndham)が1775年に出版した旅行記のタイトル『或る紳士のモンマスシャー及びウェールズの旅』(*A Gentleman's Tour through Monmouthshire and Wales, in the month of June and July, 1774*)はその間の事情を物語っている。

グレイがウェールズ旅行に言及したのはノートン・ニコルス(Norton Nicholls)に宛てた1766年8月26日付けの"do you remember, how we are to go into Wales next year?"<sup>1)</sup>が最初のものであったが、この時点でのウェールズ旅行の企画はウェールズ旅行の歴史から考えてもかなり初期のものであった。結局その旅行は行われなかったが、それはこの分野でのグレイの先進性を窺わせるものである。最終的に彼らが旅行したのは1770年夏のウースターシャー、グロースターシャー、モンマスシャー、ヘレフォードシャー、シュロブシャーの旅であった。モンマスシャーの美しいワイ川が含まれていたとはいえ、それはウェールズの旅ではなかった。同年4月14日のグレイのニコルスに宛てた手紙には"I must call on Mason at Aston (& so may you too) for a little while, the last week in May; from thence we strike across to Chester & enter Wales."<sup>2)</sup>とあり、当初はチェスターから北ウェールズに入る計画であったようである。グレイ書簡集の編者はグレイがニコルスに宛てた1770年3月20日付けの手紙の中の"As to Wales, doubtless I should wish it this summer"<sup>3)</sup>に注を付け、グレイはニコルスとこの旅行を行ったが、「ウェールズ」には行かなかった、としているのはこのためであり、また当時の認識ではモンマスシャーは「ウェールズ」ではないという意識のためでもある。しかしニコルスは1805年に書いたグレイ追想録の中で、グレイと共に1770年にイングランドの一部と南ウェールズを旅行したと記している。<sup>4)</sup>しかしニコルスの「南ウェールズ」という言葉は旅の後30年以上も経った1805年という19世紀初頭のウェールズ旅行が一般化した時代の回想であることを考慮に入れなければならない。

グレイは当時の意味での「ウェールズ」は旅行していない。しかしグレイの旅から4年後の1774年にヘンリー・ペンラドック・ウィンダムはウェールズ

を旅行し、『或る紳士のモンマスシャー及びウェールズの旅』という旅行記を残している。そこではウェールズの自然の美しさにもかかわらず、無視され、訪れる人もいないウェールズの現実が述べられている。

The romantic beauties of nature are so singular and extravagant in the principality. . . Notwithstanding this, the Welsh tour has been hitherto strangely neglected; for, while the English roads are crowded with travelling parties of pleasure, the Welsh are so rarely visited, that the author did not meet with a single party, during his six week's journey through Wales.<sup>5)</sup>

これからしても、いかに当時ウェールズが観光という面で無視されていたかがわかる。7年戦争が終わり、フランス革命の動乱が始まるまでの間の四半世紀はヨーロッパ大陸は平穏であり、多くのイギリス人は大陸を旅行したのであった。道路や宿泊施設が劣悪なウェールズに足が向かなかつたのもまた当然であったのかもしれない。

17世紀や18世紀のグランド・ツアーが馬車を仕立て、家庭教師や召使を従えての「優雅な」旅行であったとすれば、当時のウェールズの旅は、道のない丘や山や崖を縫って徒歩、または馬で行われた。それは命がけの旅でもあった。『ウェールズ小史』の著者であるA. H. ドッドはその著書の中でアイルランド街道に言及しながら、危険に満ちた北ウェールズの交通の難所ペンマインマウル(Penmaenmawr)付近の様子をステュアート朝の或る地誌学者を引用しながら次のように述べている。

On the 'Irish' road leading to Holyhead, recurrent attempts were made to mitigate for travellers the terrors of Penmaenmawr, that sheer precipice 'over which', a Stuart topographer declared, 'yf either man or beaste shoulde fall, both sea and rocke . . . woulde strive and contend whether of bothe should doe hym the greatest mischief.'<sup>6)</sup>

ウェールズの道路建設は当時の産業の要請で1755年頃から南ウェールズで積極的に行われるようになった。聖職者でもあるウィリアム・エドワーズ

(William Edwards)はタフ川に橋を架け、その後その橋のたもとにはポンティプリズ(Pontypridd)の町が生まれた。1759年には製鉄業者アイザック・ウィルキンソン(Issac Wilkinson)が後にはウェールズ最大の人口密集地で製鉄産業の中心地となるマーサー・ティドヴィル(Merthyr Tydfil)の借地権を得ている。1775年までにはロンドンとブレコン(Brecon)の間に駅馬車が走った。またこの時以降、ウェールズの過疎地帯でも救貧税の徴収が始まっている。ウェールズの風景美を求めてやって来るイングランド人がいる一方で、ウェールズ自体も徐々に変化を遂げつつあったのである。

ウィングダムは1777年に再びウェールズを訪れるが、この時彼は画家のサミュエル・ヒエロニマス・グリム(Samuel Hieronymus Grimm)を同行させている。そして彼の『或る紳士のモンマスシャー及びウェールズの旅』を再版するにあたり、グリムの作品16点を挿し絵として採用した。旅行者が画家を雇い同行させることは決して珍しいことではなかった。サー・ウオトキン・ウィリアムズ=ウィンは1771年の北ウェールズ旅行の際、随行員としてポール・サンドビーを雇った。その旅は5名の紳士と9人の召使い、それに13頭の馬で行われ、その旅の総費用は111ポンド7シリング6ペンスであったという。<sup>7)</sup> サンドビーはその時に描いたもののいくつかをアクアティントに版刻し、1776年に出版した『北ウェールズ12景』(*XII Views in North Wales*)に採用した。

またウェールズ人のトマス・ペナントはウェールズ人の画家モーゼイス・グリフィスを雇い、1769年から1790年にかけて約20年間彼のウェールズやスコットランド旅行などに同行させた。初版が1778年、第2版が1781年に出版されたペナントの『ウェールズ紀行』は彼の著作中でも最良のもので、グリフィスの描いた風景画は銅版画に版刻され、ペナントの本に挿し絵として付けられた。ペンブローク州、ミルフォード・ハイヴンの建設者チャールズ・フランシス・グレヴィル(Charles Francis Greville)の弟ロバート・ファルク・グレヴィル(Robert Fulke Greville)は1792年、2人の画家ジュリアス・シーザー・イベットソン(Julius Caesar Ibbetson)とジョン・「ウォーリック」・スミス(John 'Warwick' Smith)を伴いウェールズを旅した。

1770年代はいわゆる「識者」や「先覚者」の間に

ウェールズ旅行が注目され始め、彼らの旅行記を通してウェールズの美が徐々に理解され始めた時期であった。ウィリアム・ギルピンはグレイと同じ1770年にワイ川を訪れたが、彼が最初の著作を出版したのは1782年になってからのことであった。その間その本の原稿は知人やギルピン家にゆかりの人々の間で読まれていた。ギルピンが1782年までその著作を出版しなかった主な理由は、当時の銅版画技術はギルピンの描いた水彩画の明暗を忠実に再現することができなかったためであった。<sup>8)</sup> しかしポール・サンドビーがアクアティントの技法をイングランドに紹介すると、この技法を利用しこの著作が出版されることとなった。ひとたびこの本が出版されるとそれは時代の機運をつかみ、「ピクチャレスク」という言葉はその後美学上の重要概念となり、また景勝地へ旅行するおりのキーワードとなった。1795年出版のジェームズ・ベーカー(James Baker)の『ウェールズとその国境地帯のピクチャレスク・ガイド』(*A Picturesque Guide through Wales and the Marches*)をはじめとし、1797年のアイルランド(Samuel Ireland)の『ワイ川のピクチャレスクな眺め』(*Picturesque Views on the River Wye*)、1805年のドイツ生まれのロイヤル・アカデミー会員ローザンバーク(Philip James de Louthembourg)の『イングランドとウェールズのピクチャレスクな景観』(*The Romantic and Picturesque Scenery of England and Wales*)といった書名の本が次々に出版されたところからも「ピクチャレスク」という概念が18世紀末に一気に風靡していたかがわかる。

1780年代はギルピンの『ワイ川と南ウェールズ』、トマス・ペナントの『ウェールズ紀行』の第2版といった大変影響力の強い本が出版された。画家も引き続きウェールズに写生旅行を行っている。例えばジョン・「ウォーリック」・スミスは1784年から1788年にかけて、毎年ウェールズを訪れた。1790年代になると大陸への渡航が困難になったことも手伝い、ウェールズを訪れる人々は急増した。70年代から80年代にかけて出版されたウェールズに関するガイドブックはその情報量を増し、詩人や画家の徒歩旅行を可能にした。1795年には詩人コールリッジと共に北ウェールズを旅行したハックス(Joseph Hucks)の『書簡で綴る北ウェールズ徒歩旅行』(*A Pedestrian Tour through North Wales, in a Series of Letters*)がロンドンで出版され、聖職者で著述家で

あったウォーナー(Richard Warner)は『1797年夏のウェールズ徒歩旅行』(*A Walk through Wales, in August 1797*)や、『ウェールズ2度目の徒歩旅行』(*A Second Walk through Wales*)という本を1798年とその翌年、連続して出版している。

## 7

そして画家の後に、詩人がやって来た。ワーズワス(William Wordsworth)は1791年、1793年、1824年の3度に渡りウェールズを旅行している。彼は1791年から1793年かは不明であるが、そのいずれかの旅でスノードン山登頂を行った。スノードン山の山頂で夜明けを迎えるため、彼は友人とスノードン山の麓の村ベズゲラート(Beddelert)を夜出発したが、そのときの体験が彼の自伝的大作『序曲』の最終章を飾っている。

それは蒸し暑く、濃い霧が立ちこめる夏の夜であった。彼らが山頂に近づくにつれ明るさが増し、霧を突き抜けると月の光に照らされた霧の雲海を見る。

I looked about, and lo!

The Moon stood naked in the heavens, at height  
Immense above my head, and on the shore  
I found myself of a huge sea of mist  
Which, meek and silent, rested at my feet.

(*Prelude*, XIII, 40-4)

ワーズワスは彼の足元の霧の海の岸から3分の1マイルも離れていない所に霧の裂け目があることに気づく。

from the shore

At distance not the third part of a mile  
Was a blue chasm; a fracture in the vapour,  
A deep and gloomy breathing-place through which  
Mounted the roar of waters, torrents, streams  
Innumerable, roaring with one voice!

(*Prelude*, XIII, 54-9)

ワーズワスはそのまるで息吹いているかのような青い裂け目に、広大で神秘的な創造力の源を見た思いがするのであった。そこに描かれているものはも

はやピクチャレスクではなく、もっとロマン的な「崇高」(sublime)であった。

またワーズワスは「旅の途中ワイ川のほとりを再訪したおり、ティンターン大修道院の上流数マイルの地点で書いた詩行」("Lines: Composed a Few Miles above Tintern Abbey, on Revisiting the Bank of the Wye During a tour")という有名な瞑想詩を書いている。まず最初に彼は1793年の夏にワイト島を発ち、ソールズベリ平原を訪れ、ティンターン大修道院に至っているが、それから5年後の1798年7月にこの作品は書かれた。その詩にはワイ川のピクチャレスク風の風景描写があるが、単にそれで終わることなく、その風景の背後にワーズワスの深遠な自然観や世界観が表明されておられ、ピクチャレスク趣味を越えたロマン派文学の傑作になっている。

コールリッジ(S. T. Coleridge)もウェールズを旅した。彼のウェールズとの関係は、彼がクライスト・ホスピタル在学中、エヴァンズ夫人の家族と親しく交際することから始まった。エヴァンズ家はウェールズのレクスサム(Wrexham)の出身であった。エヴァンズ夫人が家族と共にレクスサムに旅行する計画を立てたとき、コールリッジは同行できない無念さから「失望に寄せて」("To Disappointment")を書く。彼はその詩でウェールズの地に想いを馳せる。

Then haste thee, Nymph of balmy gales!  
Thy poet's prayer, sweet May! attend!  
Oh! place my parent and my friend  
'Mid her lovely native vales

(ll. 13-16)

彼がエヴァンズ夫人とその家族を「我が親」、  
「我が友」と呼んでいるところにも、彼らの親密さが読み取れる。彼はウェールズの風景を「美しい故郷の谷」と表現するが、実際にはまだ見たことはない。しかし彼のウェールズからの連想が美しい谷であったこと自体が、当時の人々の一般的なウェールズ観を示しているとも言える。

彼はワーズワスに遅れること3年の1794年7月にケンブリッジ大学の夏休みを利用し、友人ハックスとウェールズ旅行に出かける。彼らはグロスタを出発し、ロス・オン・ワイ、ヘレフォードを抜け北上し、ウェルッシュプール(Welshpool)からウェールズに入った。ランヴァリン(Llanfyllin)からランガ

ノッグ(Langynog)、ウェールズのメソジスト派の拠点であったバラ(Bala)を訪れ、そしてレクサムへ至った。レクサムからルースイン(Ruthin)、デンビー(Denbigh)、カトリックの聖地であり北ウェールズの産業の中心地でもあるホーリーウエル(Holywell)を訪れ、コンウイ(Conwy)に至る。アバー(Aber)からアングルシー島(Anglesey)に渡りビューマリス城(Beaumaris castle)を見物、アングルシー島北端の繁栄を極めていたパリス・マウンテン(Parys Mountain)銅鉱山の積出港アムルック(Amlwch)まで行き、そこから引き返しカナーヴォン(Caernarfon)へと至る。7月23日、スノードン山に登り、帰路につき8月初旬にプリストルへ戻っている。1ヶ月を要した旅であった。

このウェールズ旅行に先立ち彼はオックスフォードでロバード・サウジー(Robert Southey)と知り合い、アメリカのサスケハナに理想の村を作るというパンティソクラシーの計画に共鳴し参加する。その後この計画は資金難を理由にサウジーがアメリカ移住を諦め、とりあえず実践の地をウェールズに計画を変更しようとしたが、コールリッジを初めとシメンバーの大反対に会い、計画自体が破綻する。<sup>9)</sup>この事実は、もはやウェールズはイングランド人にとってアメリカと同様の処女地ではないということ物語っている。

ウェールズへの旅行者は後を断たなかった。ワーズワスやコールリッジが徒歩旅行を通しウェールズを見聞したのと異なり、それ以降の詩人や文人たちはウェールズに滞在したり、定住したりするようになった。批評家で随筆家のハズリット(William Hazlitt)は1798年、ランゴレン(Llangollen)に滞在し、その時の様子を『テーブル・トーク』(Table Talk)の「旅に出ることについて」("On Going a Journey")に書いている。<sup>10)</sup> 詩人であり散文家であるウォルター・サヴェージ・ランダー(Walter Savage Landor)は1798年、スオンジー(Swansea)に滞在した。また彼は1807年に南ウェールズ、グウェント州のランソニー修道院(Llanthony priory)を購入し、その修道院を修復しようとするが、許可されなかった。しかし彼はその建物に住み、1811年には結婚し、しばしばサウジー夫妻を招いたが、1814年、隣人と不和になりランソニーを去って行った。これらは『オックスフォード版文学的英国案内』(Oxford Literary Guide to British Isles)の伝えるところである。

シェリ(Percy Bysshe Shelley)のウェールズとの関係は他の詩人とは少々変わっている。彼は1811年から1813にかけてイングランド、ウェールズ、アイルランドを転々とする。その理由は主として彼の政治的理想の実現のためであり、また借財の取り立てから逃げるためであった。彼は1811年6月、ラドノーシャーのエラン渓谷(Elan Valley)にある従兄弟の所有する家で数週間過ごした。この1811年という年はシェリの人生にとって非常に重大な年であった。すなわちこの年の3月、彼は『無神論の必要性』(The Necessity of Atheism)という小冊子を出版し、オックスフォード大学から追放された。またロンドンの商人の娘ハリエット・ウエストブルック(Harriet Westbrook)と恋愛関係にあり、シェリはこのウェールズの人知れぬ谷に気分転換を計り、かつ将来への展望を開くためやって来たのであった。しかしそこでの滞在は彼にとって退屈極まるものであり、ハリエットから手紙が届くと直ちにイングランドに戻り、それからすぐエジンバラへと駆け落ちし、そこで19歳のシェリと16歳のハリエットは結婚する。

結婚後彼らは湖水地方に住む。その間、シェリはアイルランド問題やカトリック教徒開放運動に関心をもち、『アイルランド人への呼びかけ』(An Address to the Irish People)という政治的パンフレットを書いた。アイルランドでそのパンフレットを配布し、またカトリック教徒開放運動を推し進めるため、彼らは1812年2月12日、ダブリンに到着、十分な成果を上げることなくアイルランドを去り、4月6日ウェールズのホーリーヘッドに到着する。彼らはカナーヴォンシャーを南下し、バーマス(Barmouth)から海路でアベリストゥイス(Aberystwyth)へ、そこからさらに東進し、4月14日、前年滞在したエラン渓谷の従兄弟の屋敷に辿り着いた。

彼はこの静寂の山森に囲まれた場所を革新的な人々のための前進基地とするため200エーカーの土地と「幽霊」付きの家屋を賃借しようとした。シェリの手紙は次のようにその家と幽霊や妖精について語っている。

We are now embosomed in the solitude of mountains woods and rivers, silent, solitary, and old, far from any town, 6 miles from Rhayader, which is nearest. - A ghost haunts this house, which has frequently been seen by the servants. We have several witches in our

neighbourhood, & are quite stocked with fairies, & hobgoblins of every description.<sup>11)</sup>

結局この家は様々の理由で借りることはなかった。賃借料の高さや、ハリエットの病気、またアイルランド問題に対するシェリの行動に対し官憲が監視を始めたことがその主な理由であった。彼らは6月20日、エラン溪谷を離れた。6月24日、チェプストウに至り、同28日頃デヴォンシャーのリンマス(Lynmouth)に到着した。

彼は同年8月の末、ブリストル海峡を渡り、スウォンジーに到着する。そこから北ウェールズの景勝地であり、ロンドンへの交通の要衝の地であったランゴレンに行く。しかしそこから彼は進路を西にとり、ウェールズの西海岸を南下した。そのとき彼はカナヴァンシャーとメリオネスを分ける入海トリス・マウル(Traeth Mawr)を排水し、干拓するという大工事に出くわした。

この干拓はウィリアム・A・マドックス(William A. Madocks)により博愛的な事業として行われていた。彼はボストン選出の急進派国会議員であったが、トマス・ペナントの『ウェールズ紀行』に紹介されたサー・ジョン・ウィン(Sir John Wynn)のトリス・マウル干拓計画を読み、父親の遺産が入ると、これを実行に移したのであった。ところが完成した堤防は4月の洪水で一部決壊し、マドックスは私財を抵当に入れ、修復工事を行っていた。荒涼とした未開の地に新しい共同体を築こうとするこの事業にシェリは大きく心を動かされ、この事業継続の資金を募る仕事を引き受けたのであった。これはコールリッジらがアメリカにパンティソクラシーの理念の下に理想の村を建設しようとしたことと同じように、当時のロマン派の詩人たちを魅了して止まない永遠の主題であった。

シェリはマドックスの名にちなんでトレマドック(Tremadoc)と名付けられた町の丘の上にマドックスが1794年に再建し、タナルト(Tan-yr-allt)と呼んだ家に住むことになった。シェリは9月29日にはビューマリスの集会で資金募集の演説し成果を得た。その後彼はロンドンを往復したりするが、1813年2月26日の真夜中、彼の住んでいた家タナルトで大事件が起きた。侵入者とシェリとの間に銃撃が交わされたのである。彼は旅行中常に所持していた2丁の拳銃を発砲したが、その侵入者は逃亡してし

まった。この侵入がシェリを暗殺する目的のものであったのか、それとも物盗りの仕業であったのかは未だ不明あり、シェリの狂言説すらある。<sup>12)</sup>しかし恐らくこれは彼の政治的信念と活動に対する反感であり、政治的背景を持った事件であろうと思われる。結局これを機にシェリはウェールズを去ることになった。この様にシェリとウェールズの関係は甚だドラマチックなものであったと言わざるを得ない。なおマドックスは結局この事業で破産し、パリに移り住むことになり、そこで生涯を終えた。

ジョン・キーツ(John Keats)はウェールズを訪れてはいない。彼の手紙に残る唯一のウェールズへの言及は、彼が遠くから眺めたウェールズの山々についての記述であった。それは1818年の夏、彼が始めて湖水地方の山の景観を見たときの感動を記した次の個所である。

When we had gone about half this morning, we began to get among the hills and to see the mountains grow up before us . . . Loughrigg will swell up before us all the way -- I have an amazing partiality for mountains in the clouds. There is nothing in Devon like this, and Brown says there is nothing in Wales to be compared to it. I must tell you, that in going through Cheshire and Lancashire, I saw the Welsh mountains at a distance. We have passed the two castles, Lancaster and Kendal.<sup>13)</sup>

1818年6月22日、キーツは友人チャールズ・ブラウン(Charles Brown)と共に北イングランドおよびスコットランド旅行に出かけた。翌日午後、リバプールに到着。翌24日早朝、ランカスターに向け馬車で旅立った。とすれば、キーツが遠くから見たウェールズの山々は馬車の中から見たものであり、またチェシャーやランカシャーから見えるウェールズの「山々」は決してスノードン山(1085m)を最高峰とするグウィネズの1000m級の山々ではなかった。スコットランド人とウェールズ人の血を引くというブラウンがこのような山はウェールズにはないと断定する理由は不明ではあるが、キーツもブラウンからの伝聞として伝えているようにキーツ自身も今一つ歯切れが悪い。確かに彼が実際自分の眼で見たデヴォン州に関しては彼の言葉は自信に溢れているが、ウェールズの山に関しては馬車から「眺望」し

ただけであり、判断の下しようはなかったというのが現実であろう。実際彼の手紙はすぐにランカスタ城とケンダル城を通り過ぎたと事実に移っており、遠くから見たウェールズの山々の感想は書かれていない。これからも彼の見た「ウェールズの山々」の印象の希薄さをかいま見ることができる。しかしこの遠くに見た山々が、キーツにとって最初で最後のウェールズとの出会いであった。彼は3年後の1821年、ローマで客死する。享年25歳であった。

1820年代にはウェールズは産業革命の最前線にあり、石炭と製鉄業が繁栄の道を歩み始めていた。荒れ地に突然最新式の製鉄所や、不潔な炭坑労働者の住宅が出現した。道路も次第に改善され、より多くの人々がウェールズを訪れるようになるとともに、ウェールズの古い村の美しさも姿を消していった。1816年出版の『カンブリア素描・北ウェールズ紀行』でエドワード・ピューはワーズワスがスノードン山登頂の時に立ち寄ったベズゲラートの小村を次の様に記している。

Surrounded as it is by high mountains, rocks of great asperity of countenance, it (Beddgelert) is already pretty well known to travellers, both for its romantic situation, and from its vicinity to Snowdon.<sup>14)</sup>

ピューの言うように1816年頃にはベズゲラートの村は旅行者にはかなり有名になっていたのであれば、1824年にワーズワスが手紙に書いたようなベズゲラートの俗化した姿はもはや決して驚くほどのものではないのかもしれない。ワーズワスは30年近く前のスノードン山登頂に先立ち寄った粗末な旅籠の変わりぶりを次のように記している。

... a smart hotel has taken the place of the lowly public-house in which I took refreshment almost thirty years ago, previous to a midnight ascent to the summit of Snowdon.<sup>15)</sup>

この一節には既に孤立したウェールズの姿はない。それは良きにつけ、悪きにつけ、北ウェールズでさえも明らかに新しい状況へと変わりつつある有り様を伝えている。もはやウェールズはイングランド人にとって決して未知の国ではなくなったので

あった。

(完)

## 注

1. Paget Toynbee and Leonard Whibley (ed.), *Correspondence of Thomas Gray* (3vols., Oxford, 1935 and 1971), p. 928.
2. *Ibid.*, p. 1121.
3. *Ibid.*, p. 1114.
4. *ibid.*, p. 1299.
5. John R. Kenyon, "The Tourist in Wales in the Later Eighteenth and Early Nineteenth Centuries", 『ウェールズ紀行---歴史と風景(ウェールズ国立美術館所蔵英国水彩画 1675-1855)』 出展目録 (岐阜美術館, 1998年), p. 16.
6. A. H. Dodd, *A Short History of Wales: Welsh Life and Customs from prehistoric times to the present day* (London: B. T. Batsford Ltd., 1977), p. 122.
7. Malcolm Andrews, *The Search for the Picturesque: Landscape Aesthetics and Tourism in Britain, 1760-1800* (Stanford, California: Stanford University Press, 1989), p. 112.
8. *Ibid.*, p. 86.
9. Earl L. Griggs (ed.), *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge* (Oxford, 1956), I, pp. 119 and 132.
10. P. P. Howe (ed.), *The Complete Works of William Hazlitt* (New York: AMS Press Inc., 1967), VIII, p. 186.
11. F. L. Jones (ed.), *The Letters of Percy Bysshe Shelley* (Oxford University Press, 1964), I, p. 283.
12. Richard Holmes, *Shelley the Pursuit* (Weodenfeld and Nicolson, 1974), p. 195.
13. Hyder E. Rollins, *The Letters of John Keats* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1972), II, pp. 299 - 300.
14. 『ウェールズ紀行---歴史と風景(ウェールズ国立美術館所蔵英国水彩画 1675-1855)』 出展目録 (岐阜美術館, 1998年), p. 116.
15. Ernest de Selincourt (ed.), *The Letters of William and Dorothy Wordsworth, The Later Years* (3vols., Oxford: Clarendon Press, 1939), II, P. 278.

- Allott, Miriam., ed. *Keats : The Complete Poems* (Longman, 1972).
- Coleridge, Ernest Hartley., ed. *The Complete Poetical Works of Samuel Taylor Coleridge* (Oxford University Press, 1912 and 1975).
- de Sellingcourt, Ernest., ed. *The Prelude, Text of 1850, 2nd edn.* rev. by Helen Darbishire (Oxford and New York : Oxford English Texts, 1959).
- de Sellingcourt, Ernest. *William Wordsworth : Poetical Works* (Oxford University Press, 1936 and 1974).
- Durrant, Geoffrey. *William Wordsworth* (Cambridge University Press, 1969).
- Gilpin, William. *Observations on Cumberland and Westmoreland* (Woodstock books, 1996).
- Holmes, Richard. *Shelley the Pursuit* (Weodenfeld and Nicolson, 1974).
- Rollins, Hyder E., ed. *The Keats Circles : Letters and Papers, 1816-78, 2nd edn.* (2 vols., Cambridge, Mass., and Oxford: 1965).
- Walsh, William. *Coleridge : The Work and the Relevance* (Chatto & Windus, 1973).
- Willey, Basil. *Samuel Taylor Coleridge* (London : Chatto and Windus, 1972).
- 『ウェールズ紀行---歴史と風景 (ウェールズ国立美術館所蔵英国水彩画 1675-1855)』 出展目録 (岐阜美術館).
- 『英国・国立ウェールズ美術館展---イギリス風景画から印象派へ』 出展目録, 1986年.
- 岡本昌夫, 『ワーズワス、コールリッジとその周辺』 (研究社, 東京, 昭和59年).
- 上島建吉, 『虚空の開拓』 (研究社, 東京, 1974年).
- 栗山稔, 『ワーズワス「序曲」の研究』 (風間書房, 東京, 昭和56年).
- 『世界美術大事典・全5巻』 (小学館, 東京, 1989年).
- 『世界美術大全集』, 「第20巻・ロマン派」 (小学館, 東京, 1993年).
- 本城靖久, 『グランド・ツアー』 (中央公論社, 東京, 昭和58年).
- 山田豊, 『詩人コールリッジ・「小屋のある谷間」を求めて』 (山口書店, 京都, 1986年).
- 山田豊, 『失意の詩人コールリッジ---錨地なき航海---』 (山口書店, 京都, 1991年).
- 吉田正憲, 『ワーズワスの「湖水案内」』 (近代文藝社, 東京, 1995年).

(受理 平成11年 3月20日)